

タイトル	風來山人の 會的基礎 - 永田廣志の平賀源内観によ せて -
著者	水野, 邦彦; ,
引用	北海学園大学学園論集(189・190): (1)-(7)
発行日	2023-03-27

風來山人の社會的基礎

——永田廣志の平賀源内観によせて——

水野邦彦

平賀源内といえは、「變化龍の如し」とみずから称したとおり、本

草学・物産学（今日の博物学）に始まって戯作・陶器製造・油絵制作・鉱山開発・小間物製作などに多能多才ぶりを發揮した人物として知られる。この源内のうちに、反体制的傾向ときわめて近い意味の「反對派的傾向」^①が宿っていることを夙にみいだしたのは、永田廣志である。では永田がみとめた源内の「反對派的傾向」とは、今日どのように評価されうるだろうか。

I 〈變化龍の如し〉

本草学・物産学における源内の最大の為事とみなされるのは「物類品隲」（一七六三年）である。これは源内が讃岐から江戸に出て本草家田村元雄の門に入ったのち師を説得して五回にわたって開いた薬品会（物産会）の集成といひける書物であるが、ここには、西洋自然科学の方法を導入して日本の自然をあらためて研究するという性格があらわれている。西洋の經驗的・實驗的自然探究を重んずる

源内は、のちの戯作につきのように書きつけている。

書を讀斗を學問と思ひ^②。紙上の空論を以て格物窮理と思ふより
間違も出來るなり^③。

また「物類品隲」には、いまおこなわれている最中のこと、ないし今後のこととしての敘述がふくまれている。たとえばガガイモ科の蔓草であるイケマの項目には、つぎのような書きかたがなざされている。

然ドモイマダ蝦夷産ノ生草ヲ見ザレバ是非決シガタシ今茲初春
松前候ノ醫官宮崎椿菴歸國スイケマ生草ヲ贈致ンコトヲ約ス得ル
ノ後ヲ待テ決スベシ^④

ここには源内の研究の足跡がそのまま現われている。このような私的述懐は一般に純然たる科学文献にはふくまれるものではないで

あろう。穿った見方をすれば、源内は「主観を殺して事実のみを冷静に述べるのをよしとする近代的ビューリタリズムに、まだ冒されてはいなかった」⁽⁴⁾ともいえる。

それとともに、これはまた源内が生活の裏表もなく物産学に打ちこんでいたことの現われであるにとらえる向きもあるが、他方で、源内が「物類品隲」を上梓するまえに知人に宛てた手紙の一節にも目が向けられてよい。

是亦相手之産物ハ多見覺候心ハ一ツ中々成就ハ仕間布と甚不快
之至ニ御座候⁽⁵⁾

「是」とは物産学を指すが、源内はその研究対象を一挙に見渡してしまいたく思いながらも、本草学よりはるかに広範な物産学の対象を前にして思うように研究がすすまないという焦燥感が、右の一文から読み取れるであろう。これはおそらく源内の性格に由来するところが大きく、源内は移り気で「新奇なものをめまぐるしく追求め、興の赴くままに何にでも手を出し、一つのことについていかかざらうことをしなかった」⁽⁶⁾といわれる。ひいては、源内はいちどに多種多様な事柄にかかわって興味関心が四散してしまい、一本の筋道を立てて打ちこむことができなかったといえるかもしれない。「つかみどころのない人で、本領がどこにあるのか、いまもってわからない」⁽⁷⁾といわれるのも、ゆえなきことではない。

II 〈先走り〉

さきの手紙のすこし前の箇所では源内はこうしたためている。

私儀甚多用ニ而扱々埒明不申⁽⁸⁾

こうした源内の姿勢ないし性格は、よかれ悪しかれ生涯をとおり源内の意識の常態であったと考えられる。

変幻自在ともいえるほどに源内は三面六臂の為事に著手した。それらのひとつひとつが「どの分野でもそれぞれに一期を画するほどの創意に満ちた仕事」⁽⁹⁾であったのか、それとも「いづれをとりあげてみても深く沈潜した跡がなく、だいいち本領とする本草・物産学においても、その学問的成果のほどは、先人の業績を大きく凌ぐような種類のものではない」⁽¹⁰⁾のか、にわかには決しがたいが、それらの多様な関心・問題意識・研究意欲を貫いてこそ〈平賀源内〉は存在したのではないか。個別の各分野での取り組みかたや成果をみるだけでは源内像は得られないように思われる。

源内は「根南志具佐」(もしくは根南之具佐・根奈志具佐・根無草とも)という戯作をものしている。この戯作の作者は「天竺浪人」として知られているが、源内はほかに「風來山人」という筆名を用いることもある。これらのことは、讃岐から大坂・京都・江戸へと渡り歩いてきた経歴にとどまらず、「封建的束縛を嫌い、世間の常識を破る奔放な精神と生活態度」⁽¹¹⁾を自覚的に示したものであろう。

戯作「風流志道軒傳」には、「唐は唐日本は日本、昔は昔今は今な

り¹²」という相對主義的言辭をまとった一節がみられる。ここには唐の儒者に心酔した日本の儒者にたいする嫌悪が滲み出ているとともに、粹にはめられることを嫌い、世間のしきたりを尻目に（根無し草）であるうとする源内の心意が垣間みられるであろう。

湯上りや世界の夏の先走り¹³

——これは源内二九歳の句である。先走りとは、まさに源内のありようを示す言葉でもある。源内に近代的精神が宿っていたことは多くの論者が指摘する。そのひとつは危険をおそれずに試行錯誤に徹する冒険的精神である。たとえばつぎの書簡の一節にそれがあらわれている。

考て見てハ何でも出来不申候我らハ志くぢるヲ先ニ仕候

鞠も落ねハ上り不申候¹⁴

ここにみられるのは、失敗は成功のもと、ということにとどまらず、むしろ失敗しなければ成功せず、すべては失敗から始まるとでもいふべき信念であろう。源内の気の短さとともに、世間の常軌から離れるためには実験と冒険の精神が不可欠だという確信が、ここから読み取れる。

さらに踏みこんで、源内は実験や観察に代表される自然科学的な発想と知見とを手ずるに、儒者や世間の封建的束縛を敵にまわし、

それらにたいして批判的な立場をとったと逸早く評したのが、永田廣志であった。

III 自然科学主義的傾向

永田廣志は「生産様式を生産力の諸要素の統一として把握し、この生産様式はその歴史的具体的規定性においては、生産関係と分離することができず、この意味において『生産力を規定するものは生産関係である』ことを事実上誰よりも強調した人¹⁵」と評価される学者である。永田は一九〇四年に長野県山形村に生まれ、松本中学校在校時より哲学や社会思想に関心を向けはじめたという。同時に数学に秀で、のちにいたるまで「数学は全ての学芸の基礎であるといふのが持論であった¹⁶」。東京外国語学校露語部に学び、「ロシア語の抜群の語学力をもっていた永田は、ロシア語の翻訳には殆んど辞書を必要とせず、彼自身『ロシア語に関する限り日本語と同じ』と自慢することができた¹⁷」といわれる。

源内が上述の「書を讀斗^{よむばかり}を學問と思ひ。紙上の空論を以て格物窮理と思ふより間違も出来るなり」という句をもって儒者を批判したのは、源内が「ヨーロッパ人の經驗的、實驗的自然研究の優越を認めたからであらう¹⁸」と永田は論ずる。源内は、本草学・物産学・博物学・人参栽培・甘蔗栽培・製糖法開発・鉱石鑑定・石綿製作・発電機製作その他にかかわり、「經驗的、自然認識」を蓄積し、「當時にあつては極めて多面的な自然科学的知識の持主であつた¹⁹」のである。「自然科学主義的傾向」を帯び「實證主義的」ともいわれる源内の世界観は「明かにヨーロッパ人の進んだ自然科学的知識との接觸

にも負ふもの」だと考えられるのである。¹⁹⁾

永田は同じ年に上梓された別の著書でも、「源内における唯物論的傾向は、先行せる経験科学の發達を一應土臺として、蘭學との接觸によつて培養された自然科學主義に立脚するものであつた」こと、源内は「極めて多面的な自然研究者」であり、「傑出した頭腦の持主だつた」ことを、書きしるしている。²⁰⁾

徳川時代において源内のほかに西洋的な自然科学に近い発想を有していた人物として、源内とつきあひのあつた司馬江漢や山片蟠桃らがいる。これらの人々について永田はこう論ずる——「彼等三人は等しく唯物論的傾向にあり乍も、そのニュアンスに相異があり、蟠桃は合理主義的な窮理の見地から、神の存在や靈魂不滅に關する觀念の非合理性を詳細に論じ、宗教的惑溺の害毒を痛論してゐるのに反し、源内や江漢にあつては唯物論的、無神論的主張はそれ程確定的に現はれもせず、詳細にも展開されないで、むしろ特殊な自然哲學、特殊な物質論によつて靈魂不滅が否定されてゐる」²¹⁾。ここでいう「特殊な自然哲學、特殊な物質論」とは、源内や江漢が「火を自然の力の源泉と見做し、人間精神をも火と考へ、その際この火は人間の死と共に消失するものとして無鬼論を唱へ」た末に到達した「無神無靈魂の唯物論的觀念」を指している²²⁾とみてよいであろうし、それは「ギリシヤの唯物論的な自然哲學と類似した理論的内容を持つてゐる」²³⁾かもしれないが、しかしこれは、あくまで類似したもの²⁴⁾にすぎず、ギリシヤの唯物論的な自然哲學に並べられるものとはいいがたい。

しばしば源内には「唯物論的、無神論的主張」がみられるともい

われるが、それらが理論的に明示されているわけではなく、また「ヨーロッパ人の進んだ自然科学的知識との接觸」があつたとしても、それは自然科学主義的傾向を垣間見せるにとどまつたというべきである²⁵⁾。

IV 反封建的萌芽

源内および江漢は「蟠桃の如く冷徹な思想家であるよりも、むしろ文人的性格に富み、その思想を理論的な仕方²⁶⁾で展開することには興味を持たなかつた。……一方、蟠桃と、他方、源内および江漢の、學風もしくは性格のそつち²⁷⁾した相異は、その世界觀の社會的基礎の相異を暗示するものである²⁸⁾」と永田はいう。源内の「世界觀の社會的基礎」から生まれた儒者批判および武士階級イデオロギーの批判には、その世界觀の「階級的基礎が反対派の分子——未だ胎生期乃至幼少期にあつたものにせよ——にあつた²⁹⁾」こと、武士階級にたいする「反対派的傾向を示しはじめた町人層のイデオロギーの一變種³⁰⁾」として源内の世界觀が形成されたことが刻みこまれている。

永田はつぎのように論ずる。

源内は、封建制の矛盾を激しく經驗し、それに滿腔の不滿を懷いた人であつた。……多面的な才能を持ち、功名心に驅られ、田沼意次に寵遇された彼は、小藩の小祿に愛想を盡かし、より有利な仕官を望んで致仕を願つたのに、願意聞届けの條件として他藩への仕官を禁ぜられたので、本意なくも浪人となり、また彼の新しい學問や創意に富んだ事業は世人から何ら理解され

ず、不満と懊惱は彼をして世を白眼視する戯作者たらしめた。……士官に望を無くした源内は、正にこの現存制度、秩序に對する深い不満を表白した限り、反封建的萌芽——よしそれは極めて小さな萌芽であつたにせよ——を示した人として、注目されてよいだらう。⁽²⁷⁾

しかも永田は、源内が経験した矛盾について「彼の意識した社會的矛盾は……封建制の根本矛盾ではなくて、むしろ派生的、副次的な矛盾」であつたとみなし、世の現実にたいする源内の不満や憤慨は「現存秩序に對する不満ではなくて、自身の個人的境遇に對する不満たるにとどまる」ものであつたとみなす。それゆえ「反封建的萌芽」たりうるはずの源内の不満が社會にたいする理論的思想的批判に向かつたとは言ひ切れず、もつぱら「悟りや諦めや人間愚弄へと歪められた」のだと受けとめる永田は、源内の反封建的萌芽の「生長能力は薄弱」にとどまつたという。みずからを「先覺者なるが故に不遇なりと諦め、時世に絶望した」源内の「反封建的萌芽」は、けつきよく「極めて小さな萌芽」にとどまらざるを得なかつたとみなされる。⁽²⁸⁾

また儒者を批判するさいにも、儒学のいう五倫（「聖人の教」——「人間社會はかならず身分的差別にもとづく階級的秩序をもつた社會たるべし」⁽²⁹⁾）と前提する教え——そのものは源内の批判対象ではなく、源内はただ「この教を活用しえない儒者を批判する」⁽³⁰⁾）のであつた。

永田はこれらの点を突いて、源内が「封建的イデオロギー、就中

それによつて正當化される社會的關係に對するラヂカルな批判者ではありえなかつた」としるす。禁欲や克己を旨とする儒教道徳を離れ「人間は惑溺しない限りの享樂を樂しむも可なり」とする源内の姿勢が、「欲望の満足を妨げる制度への批判にまで發展せず、かの『聖人の教』によつて辯護される社會的關係と兩立するものであつた」と永田は看破したのである。⁽³¹⁾ さきにみた、武士階級にたいする「反對派的傾向を示しはじめた町人層のイデオロギーの一變種」と位置づけられる源内の「階級的基礎」は、このことを物語っている。

V 地に足のついた「社會的基礎」へ

「新しいものを見て次々に工夫していく」⁽³²⁾ だけの才覚と知識と技術とを合わせもつていた源内は、一八世紀日本において自然科学的な知見と洞察力とをそなえた刮目すべき人物であるが、社会科学的事象において卓越した知見と洞察力とを有していたとはいいがたい。源内の脳裡を占めていたと思われる「特殊な自然哲學、特殊な物質論」や「無神＝無靈魂の唯物論的觀念」は、ある種の〈物質〉概念をもつて社會や人間を洞察し分析する唯物論の体をなすには到らなかつた。そもそも源内は、社会科学や哲學のような「思想を理論的な仕方でも展開することには興味を持たなかつた」という先の評言は的を射ているであらう。

源内にあつて「世界觀の社會的基礎」もしくは「階級的基礎」は脆弱であつたようにもみえる。それは、さしあたり儒者および武士階級にたいする「反對派的分子」すなわち〈反体制〉であること、「封建制の矛盾」にたいする「滿腔の不满」、もしくは「反對派的傾

向を示しはじめた町人層のイデオロギーの一變種」とみなされるものであろうが、上述のとおり源内にとつての社会的矛盾は「派生的、副次的な矛盾」であり、不満は「自身の個人的境遇に對する不満」であるとするれば、「現存秩序」にたいして批判の矛先を向ける「反封建的萌芽」よりも、源内自身が武士社会で置かれた境遇——「封建の身分社会と、大衆化された都市社会のいずれにも座標をもちえなかつた、彼のマージナルな立場」——こそが、源内の「社會的基礎」ないし「階級的基礎」に近い、とみなすほうが適切であらう。

けれども、ひとり個人が特定の社会で置かれた境遇が、それだけで個人的境遇の域をこえて「社會的基礎」や「階級的基礎」となることは稀であらう。個人的境遇はあくまでも個人の領域にとどまり、ほかの人々に共有される見込みはほとんどなく、集团的・社会的ひろがりをなしがたい。集团的・社会的ひろがりが生ずるには、ほかの人々の共感や共鳴が不可欠であり、そのうえで連携ないし連帯が生まれる。あい異なる人々の間でこうした連携ないし連帯がつかられてこそ、地に足のついた「社會的基礎」もしくは「階級的基礎」が形成されるであらう。

そのように生や境遇にかんして源内が他者と共感し共鳴することは、ほとんどなかつたのではないか。そうだとすれば、源内と他者との間には連携も連帯も薄弱であつたと推測するのは、理のないことではない。ここに源内の「社會的基礎」もしくは「階級的基礎」がじゅうぶんに形成されなかつたゆえんが存し、同時に源内の限界がみいだせるであらう。

- (1) 永田廣志『日本封建制イデオロギー』白揚社、一九四七年〔原本は一九三八年刊〕、三〇八頁。
- (2) 平賀源内先生顯彰會編『平賀源内全集』上巻、名著刊行会、一九八九年、三五八頁。
- (3) 『平賀源内全集』上巻、八〇頁。
- (4) 芳賀徹『平賀源内』朝日新聞社、一九八九年、一六四頁。
- (5) 『平賀源内全集』上巻、六一二頁。
- (6) 城福勇『平賀源内』吉川弘文館、一九七一年、二〇三―二〇四頁。
- (7) 平野威馬雄『平賀源内の生涯』筑摩書房、一九八九年、二二三―二一四頁。
- (8) 『平賀源内全集』上巻、六一二頁。
- (9) 芳賀徹『平賀源内』一四頁。
- (10) 城福勇『平賀源内』二〇四頁。
- (11) 松本三之介「近代思想の萌芽」『現代日本思想体系Ⅰ 近代思想の萌芽』筑摩書房、一九六六年、三二二頁。
- (12) 『平賀源内全集』上巻、四九九頁。
- (13) 浜田義一郎『平賀源内の『有馬紀行』』『文学』一九六六年七月号、六四頁。
- (14) 『平賀源内全集』上巻、六二七頁。
- (15) 平子友長『社会主義と現代世界』青木書店、一九九一年、二五一頁。
- (16) 『深志百年』深志同窓会、一九七八年、五六九頁。執筆は中村磐根。
- (17) 『深志百年』五七六頁。
- (18) 永田廣志『日本封建制イデオロギー』二九六頁。
- (19) 永田廣志『日本封建制イデオロギー』二九六頁、三〇七頁、三二九頁。
- (20) 永田廣志『日本哲學思想史』三笠書房、一九三八年、二二六頁。
- (21) 永田廣志『日本封建制イデオロギー』二九八頁。
- (22) 永田廣志『日本封建制イデオロギー』三二四頁。
- (23) 永田廣志『日本封建制イデオロギー』三二七頁。
- (24) 永田廣志『日本封建制イデオロギー』二九八頁。
- (25) 永田廣志『日本封建制イデオロギー』三二九頁。

- (26) 永田廣志『日本封建制イデオロギー』三〇八頁。
- (27) 永田廣志『日本封建制イデオロギー』三〇一～三〇二頁。
- (28) 永田廣志『日本封建制イデオロギー』三〇二頁、三〇三頁、三〇四頁。
- (29) 竹内芳郎『意味への渴き』筑摩書房、一九八八年、一九七頁。
- (30) 永田廣志『日本封建制イデオロギー』三〇八頁。
- (31) 永田廣志『日本封建制イデオロギー』三〇八頁。
- (32) 中山茂・田中優子『工夫』のテクノロジー』別冊『太陽』六五号、平凡社、一九八九年、一〇九頁。
- (33) 吉田光邦『マジナル・ナシヨナリスト』『ユリイカ』第二〇卷第四号、青土社、一九八八年、一六二頁。

* 本稿は三五年間ほど篋底にあつた手稿をもとに、原型をとどめないほどの刪潤と、寺田吉孝先生の四半世紀にわたるご高誼への深謝の念とを加えて成ったものである。

